

浄泉寺護寺会報

URL <http://www.hds-net.com/jousenji/>

発行者 浄泉寺護寺会会長 赤 間 栄 夫

就任あいさつ

護寺会会長 赤 間 栄 夫

東日本大震災よりまもなく1年4ヶ月になろうとしている6月24日の護寺会の総会で会長に就任しました赤間栄夫です。

浄泉寺には、二つの組織があります。それは宗教法人の総代会と任意団体の護寺会です。護寺会の会則第5条には、会長は理事の中から選出すると定められております。任期は3年で今回が役員改選に当たっており、去る6月4日に開催された役員会にて、岸会長の辞任と新会長の選出の提案があり、ただちに協議を行いました。会長の選出までには至らず、後日二・三の理事の方々に打診をいたしお願いを申し上げましたが、浄泉寺の外にも他の会の役員をお引き受けしており今回は無理ですが、いずれは協力をしなければと

護寺会の総会までの日程が刻々と迫って来ておりなんとかしなければと心配しておりましたところ、再度私に是非引き受けてほしいと依頼をされました。しかし私は後期高齢者であり最近は頼に老人性難聴が進んできており、頭の方でも後期高齢で私なりの事情もありお断りしておりました。

いろいろな事情があるでしょうがそこをなんとか暫定では是非お願いしますと言われて、暫定という条件で引き受けをした次第です。

前会長の岸さんには2期6年にわたり浄泉寺の護寺運営に誠心誠意ご尽力をいただきました。まだまだ元気でご活躍をと思っておりましたところ、後期に体調を崩されましたが、自分の身体に鞭打ち任期を全うしなければという強い思いが感じられました。本当にご

苦勞様でした。これからは療養に専念され、一日も早いご快復を心より祈念いたし感謝と御礼を申し上げます。

会長を引き受けた以上は微力ですがご指導ご鞭撻を賜りながら務めさせていただきます。皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。

総会終了後は、引き続きこの度の春の叙勲に瑞宝単光章を授与されました浄泉寺の総代であり護寺会の理事である渡辺敏雄さんの受章記念祝賀会が開催されました。

渡辺さんは昭和22年10月に消防団に入団以来41年にわたり、防火思想の普及・啓発・災害防止などにご尽力されました。消防団の活動はあくまでもボランティアであり、その上命をかけて住民の生命・財産の保護にご尽力されました。生活手段の給与をいただいている受賞とは、同じ受賞でも重さが違うと私は思います。本当におめでとうございました。

(合 掌)

越後の親鸞 II

責任役員 赤間 栄 夫

親鸞の妻である恵信尼については諸説がありよく分からない点が多いのですが、自筆の手紙によればかなりの身分階級の出自であろうと推定されます。当時は字を読み書くことが出来る人は極めて稀であり、大部分の民衆は文盲であつたと思われます。

大部分の国民が文字を読み書き出来るようになったのは、明治維新後で江戸時代には寺子屋の普及等により一般の町家の子供でも字を読み書き出来る子が多くなりま

したが、それでも農民や職人の大部分は字が読めなかったと考えられます。ましてや鎌倉時代にあつてはなおさらのことだったでしょう。恵信尼が読み書きできるということは、それだけでも彼女の出自が相当の身分であつたことと容易に推定されます。

また、恵信尼の書いた文字や文

章の内容も、彼女の教養の高さ

うかがわれます。例えば、手紙の中でも夫親鸞のことを「殿」と呼んでおりますし、手紙が書かれている和紙なども一般にはなかなか手に入らない高級な紙質であることもそれを裏付けることといえましょう。また「あやのきぬ」や「あやのこそで」を欲しがったり自分の子供を「きんたち(君達)」と呼んだりしていることも推察を強めるものと思います。

恵信尼の出自

恵信尼の出自については古い資料には何も伝えられていません。最も古い伝承は、恵信尼が亡くなつて280年も経てから編纂された「大谷一流系図」の註に「兵部大輔三善為教女」とあるのが最も古い記述です。

恵信尼が亡くなつてから約30年も経過して突然現れた記事で

すので、そのまま簡単には信じられないという意見も強いのですが他に手がかりが得られない以上、この三善家出自説は最も有力な説と考えるとよいと思います。

室町時代

九条兼実の日記『玉葉』の中に「三善為則」という人物が、恵信尼の生まれた年まで「越後介」に任ぜられていたことが記されています。国府から東南三里の現板倉町大字東山寺にある山寺薬師とい

う古寺の本尊の胎内の銘に明徳5年(1394年)から2年程かけて、三善讃阿という人がこの薬師三尊像を寄進したということが記されており、室町時代には、この地域に三善氏という豪族が勢力を張っていたということが明らかになっております。

恵信尼が親鸞と結婚してもうけた信連房の住地と伝えられる「栗沢」や、同じく二人の子である益方の住地とされる「ますかた」がいずれも山寺の近辺であり、恵信尼自身も晩年はこの付近に住して

いたらしいことも以上の説を裏付けるものといえましょう。

恵信尼の晩年の手紙の中で8歳のとき、高さ7尺の五重の石塔を石屋に注文して出来上がったことを覚尼に報告しています。現在板倉町米増に存在する古い形式の五輪の塔が、恵信尼の石塔であると推定されて整備され、恵信尼の廟所となっております。

さて、このように親鸞と土地の娘である恵信尼との結びつきは、どのような意味を有していたのでしょうか。先に述べたように、親鸞は越後に遠流になったのですが、その生活は「延喜式」によって最初の年は一日に米1升、塩1勺が支給されるけれども翌年の春には種もみが支給されるだけで、後はすべて自給自足しなければならぬという、誠に厳しいものでありました。都人で貴族の出身であつた親鸞にとって、それまでに経験したことのない大きな試練であつたに違いありません。

(「親鸞の教えに学ぶ」より)

平成24年度 浄泉寺護寺会総会報告

平成24年度浄泉寺護寺会総会が去る6月24日(日)午後1時から浄泉寺本堂にて開催されました。

出席者全員による正信偈唱和、「俱会一處」前での焼香の後、総会の開会となりました。

蘇武理事司会のもと、岸会長の挨拶に続き、庄子氏が議長に選出され、事業報告等の議案8件を審議、全て満場一致で可決承認されました。

▼平成24年度総会議案

平成23年度事業報告

上山研修基金報告

特別会計「維持改善基金」報告

監査報告 監事内田政明氏

平成24年度事業計画の承認

平成24年度収支予算の承認

役員改選

前会長の岸順幸氏より「健康上の理由から会長を辞任したい」との申し出があり役員会に諮った結果、新会長に浄泉寺責任役員赤間栄夫氏が選出されました。

新役員の方々は次のとおりです。

会 長	赤間 栄夫(通丁二)
副会長	菱沼 久喜(通丁二)
庶 務	渡辺 敏雄(仲町)
会 計	岡本 修一(通丁南)
理 事	坂本 勇(仲小路)
理 事	中山 功一(下町)
理 事	小松 善男(本町)
理 事	浜田 信一(横町)
理 事	米倉 孜(川原町)
理 事	渋谷 至一(川原町)
理 事	伊藤 敬一(二ノ構)
理 事	渡部 運作(寿丁)
理 事	石崎 純一(川原小路)
理 事	千葉 仁一(共栄)
理 事	蘇武 則行(新橋)
理 事	佐々木芳雄(東川原町)
理 事	岸 順幸(町外)
監 事	内田 政明(通丁)
監 事	平塚 正寛(横町)

総会終了後には、叙勲されました浄泉寺総代渡辺敏雄氏の叙勲祝賀会と、恒例となった門徒皆さんでの懇親会が行われました。

総代渡辺敏雄氏叙勲

浄泉寺総代、護寺会理事を務められている渡辺敏雄氏(仲町)が平成24年春の叙勲にて「瑞宝単光章」を授与されました。

氏は、昭和22年10月24日岩出山警防団に入団以来、昭和23年の組織改編(岩出山町消防団となる)を経て昭和63年3月31日退団までの41年の長きにわたり消防人として岩出山町の防災業務に精励されました。

入団以来岩出山町全地域を管轄する本分団員を拝命後、多くの災害現場や火災現場に出動され、特にポンプ自動車による消火活動は枚挙に暇がありません。

また、ポンプ自動車操法技術に長け、毎年行われる操法技術大会では大崎地区優勝はもとより宮城県大会でも入賞する等多大な実績を残されました。

昭和57年には本部分団長を拝命し、昭和63年の退団までリーダーシップを発揮されました。

お盆の行事について

◎8月7日、午前5時から一斉清掃(墓地、境内地)、各自の墓地と本堂境内周辺の清掃を行います。6時から朝の勤行(おつとめ)、本堂で茶会、7時に解散となります。

◎8月13日～16日の夜6時30分～8時、万灯籠会が行われます。参道両側の灯籠に、赤あかと灯がともり、幻想的な雰囲気の中で墓参りは、夜の風物詩ともなりました。是非、ご家族揃って出かけください。

なお、灯籠記名のお申し込みは地区役員か寺までご連絡ください。会費は一基千円となります。

お墓参りのお願い!

- 造花はあげないでください。
- お供物はお持ち帰りください。
- 茶わん、カン類等、燃えないゴミはお持ち帰りください。
- ゴミ置き場には、紙、樹木、生花以外は捨てないでください。

平成24年度門徒研修会に参加して

仙台組門徒会員 庄 司 寿 夫

今年から責役総代会が門徒研修会と名称が変わり、その会が5月30日に、東北別院で開かれました。浄泉寺から赤間栄夫氏(責役総代)と二人で参加しました。ご住職と共に「葬儀・法事等」を学んでいくのが目的の一つです。そして、総代の中から問題を出し合うことです。

22年度は赤間栄夫氏が「寺院の建設について」の話題提供されました。23年度は東日本大震災のために中止になりました。今年度は山岸栄治氏(浄満寺門徒)の「七高僧物語を読んで」についての話題提供でした。その主旨は次の通りです。

七高僧とは龍樹菩薩(印度、大乘仏教を広める)、天親菩薩(印度、無量寿経の本当の意味に気付く浄土論を著す)、曇鸞大師(中国、他力浄土の教えを伝える)、道綽禪師

(中国、前に生まれた者は後を導き、後に生まれた者は前を訪への教えを伝え続ける)、善導大師(中国、浄土を絵で表した変相図を作り、浄土の教えを長安中国全土に広める)、源信僧都(日本、念仏往生の教えを分りやすく説く「往生要集」を著す)、法然上人(日本、「選択本願念仏集」を著す)です。

山岸氏はこの七人に釈尊、親鸞聖人を加えて、九高僧としたい考えです。山岸氏は水道事業者なので水道の水に例えると次の様になります。釈尊という天から雨が降り、龍樹という浄土教の大地に滲みて天親川となつて、曇鸞というダムから道綽という貯水池に入り、善導という浄水場へ、源信という配水池より、源空という導管を通り、親鸞という蛇口から私たちの飲料水(浄土真宗)となつて届いているという比喩的表現で、

大変分かり易い表現です。また、山岸氏が七高僧物語を読んで一番好きなところは次の文なそうです。「貧富、学問の有無を問わず、全ての人がいつでも、どこでも平等に南無阿弥陀仏を唱えればわけへだてなく救われる」、このことに生涯を尽くすと言われました。山岸氏の誠実な人柄がよくうかがわれます。

住職の那波昭西師(強化委員長「東漸寺」)はお寺の中心は「南無阿弥陀仏」を唱えることが基本であり、疑問をもつ前に「南無阿弥陀仏」を唱えることが大切であると力説されました。また、毎日の生活で、念仏を唱えますと、「子ども、孫まで伝わっていく」というお話は、今の時代にこそ大切なことだと思います。約2時間30分があつという間に過ぎました。

終りに、今回の研修機会を与えていただいた赤羽根住職様始め門徒の皆様感謝しています。と同時に新しい人が一人でも多く参加することを願っています。

あ と が き

5月30日仙台組主催門徒研修が行われた。組内20ヶ寺から各寺代表の門徒さん60名ほどが集まった質疑応答の中で「念仏は声を出してするものか黙念なのか」という問いかけがあつた。「念仏は南無阿弥陀仏と声に出してください、それが称名念仏なのです。仏の声を自分が聞くほどの音の量で：」というのが答えでした。

心の闇は音なり：。カスミガセキには、国民の声を「大きな音」にしか聞こえない人がいるようだが、闇の世界なのだろうか？とわの闇より 救われし

身の幸なにくらぶべき
六字のみ名を となえつつ

世のなりわいに いそしまん
これは真宗宗歌の歌詞で、「生活の中で自分の役目を精一杯果たしていくこと」、つまりご恩報謝を説いているものです。「切なる声」を「音」にしか聞こえない人にこそ教えてあげたい。(合 掌)